

こどもの食 支える工夫

新型 コロナ

子育て家庭 どう支援 子ども食堂やNPOの活動

新型コロナウイルスの影響による休校で給食がない中、子育て家庭の食をどう支援するか。感染リスクを踏まえて人が集まるのが難しい状況下、県内の子ども食堂やNPO法人は頭を悩ませ、工夫を凝らしながら活動を続ける。

(大西明梨)

「家族みんな元氣？ このお弁当は早めに食べてね」。「こども食堂 青空」代表の中村幸恵さん(54)が19日、敦賀市の多目的広場で子どもたちに声をかけながら弁当を手渡していた。

感染防止のため、利用者の大半はドライブスルーだ。小学生2人と保育園児1人の母親(38)は「給食がなくなると食費が多くなるので、とても助かっています」と話していた。

9月、月2回、集まった約30〜40人の子どもたちに、地元野菜を使ったコロケや煮物などをふるまう。ボランティアのスタッフは市内の主婦たち。子どもの「孤食」を解消する食堂はかわいい笑顔のほか、高齢者も集う地域の憩いの場でもあった。

そんなにぎやかな「日常」が感染拡大で一変。3月初旬から活動を休止せざるを得なくなった。給

約5%が「なくなった」と回答。

食もなく、中村さんは「おなかいっぱい飯を食べられていないかな」と案じていた。

集まらない分、かわりに始めたのは弁当の提供だ。3月末から月2回、電話などで希望者を募り、1回に約160個を配る。子どものお弁当代3000円は青空が負担する。食材の寄付で成り立った食堂と比べ、運営経費は3倍に。それでも「こういう形でも、顔をあわせることに意味があるから」と活動を続ける。

中村さんが5月に行った、県内の子育て家庭の約70人への新型コロナウイルスに関するアンケートでは、収入について約46%が「減った」、



①子育て家庭に弁当を配る「こども食堂 青空」の中村幸恵代表(左) ②敦賀市神楽町1丁目 ③ひとり親家庭に野菜などを配る活動を行う「フードバンクふくへい」の出雲晴夫理事長 ④鯖江市御幸町3丁目

お弁当配布や換気対策 「安心」届ける

中村さんは「世間体を気にするなどで『困っています』と言えない家庭がたくさんある。感染防止のために人との関係が疎遠になる中で、その悩みを拾ってあげたい」。青空の開始から約5年。子ども食堂を巡る環境は大きく変わった。「『集まる』ことが大切だったのが子ども食堂。今後、どう活動していくかを考えていかないといけない」



ひとり親家庭に、地元農家から寄付された野菜や米などを配る鯖江市のNPO法人「フードバンクふくへい」は、配布場所の換気をよくするなど対策をとりながら活動を続ける。1日に来るのは5〜10家庭。最近は企業などから、給食や機内食で使わなかったお菓子などの寄付が増えているという。

15日は、出雲晴夫理事長(72)の自宅が配布場所に。出雲さんは母親に「お子さんはいくつになっただんやっけ」などと話しかけながら、小松菜やチーズを渡していた。中学生の息子がいる40代の母親は「子どもが食べ盛りなので食材がもろえて助かるし、見守ってもらえている感じがする」と笑顔だった。

出雲さんは「感染の不安はあるが、野菜が好きと言っていた子どもの顔が浮かぶから活動はやめない。どんな状況でも子どもたちが安心してご飯を食べられる環境は、社会全体で守っていかないと」と語った。